

P-5 歯科衛生士学生に対する緩和ケア教育についての現状 —質問紙による予備的調査—

○船原まどか, 本田 尚郁, 中道 敦子, 引地 尚子

九州歯科大学歯学部口腔保健学科

Current status of palliative care education for dental hygiene students :
Preliminary survey by questionnaire

○FUNAHARA Madoka, HONDA Hiromi, NAKAMICHI Atsuko and HIKIJI Hisako

School of Oral Health Sciences, Faculty of Dentistry, Kyushu Dental University

キーワード：緩和ケア, 学生教育, カリキュラム

Key words : palliative care, student education, curriculum

目的

近年の医療技術の進歩や厚生労働省による地域包括ケアシステムの推進に伴い、重篤な全身疾患を有しながら、在宅で日常生活を送る有病者や高齢者の割合が、今後さらに増加することが予想される。すなわち、社会や医療現場において、在宅で「看取り」を含む緩和ケアに従事できる医療者のニーズが高まると考えられる。現在、歯科衛生士養成校においては、高齢者の口腔環境改善、口腔疾患予防、健康寿命の延伸に関わる教育に関して充実を図っているが、「看取り」を想定した「緩和ケア」教育についてのカリキュラムは未だ充実していない。本検討では歯科衛生士養成校における緩和ケア教育の現状および学生への教育効果の把握を目的とし、質問紙票を用いた予備的検討を行った。

対象と方法

対象は2017年～2019年に某大学口腔保健学科在籍の3年生(1学年25名, 延べ50名)、4年生(延べ50名)に対し、緩和ケアに関する知識やイメージの聞き取りを中心とし、現在受講する緩和ケア関連講義の質的・量的感想について質問紙調査(全12問)を行った。本研究は九州歯科大学倫理委員会に照会し、人を対象とした研究の一般的な倫理的配慮に基づいて調査を実施した。

結果

3年生においては「大学で緩和ケアに関する授業を受講したか」という問いに対しては「はい：60%」「いいえ：40%」であった。「緩和医療・緩和ケアに対するイメージ」の項目では「やりがいを感じ、関わっていき

い：12%」, 「やりがいを感じるが、不安がある：82%」, 「自信がないので関わりたくない：6%」であった。また「大学での緩和医療に関する授業は十分であると感じたか」に対しては、「はい：15%」「いいえ：75%」という結果であり、「学外の緩和医療に関する講義、研修会、セミナーなどがあれば、今後受講したいですか?」についての回答は「はい：83%」「いいえ：17%」であった。4年生では3年生と比較し、特に就職に関する回答に違いが見られた(回答率99%/100名)。

考察

3年次の質問紙項目「緩和ケアに関する授業を受講したか」の回答について、調査では緩和ケアを科目名に標記した科目はないが、緩和ケアの内容に触れる講義があったため、同学年内で回答が分かれたと推測された。また、「緩和医療・緩和ケアに対するイメージ」や「大学での緩和医療に関する授業は十分であると感じたか」などの質問の回答から、学生は今後社会において自らが緩和ケアに関わる必要性・必然性を自覚しながらも、知識および技術力不足による不安を感じていることが推測された。「学外研修会やセミナーの受講を希望するか」の問いに対し「はい」の割合が高いことから、学生の意欲に相応した学外・卒後研修のニーズが示唆されたと考えられる。

今後さらに質問紙による調査データを蓄積すると共に、調査校以外においても、歯科衛生士学生に対してどのような緩和ケア教育がなされているのか調査を行う必要があると考える。また同時に、緩和ケア教育においては、実習先の確保や講義を行う歯科衛生士講師の確保が難しいなどの課題もある。これらの問題についても、今後明らかにしていく必要があると思われた。